資料４－２

ワークショップの実施状況と知床の価値を伝えるテーマとストーリーの案

適正利用・エコツーリズム検討会議

WG委員　地域団体　行政機関

検討体制

作業部会の役割とイメージ

位置付け
- エコツーリズム検討会議の作業部会
- IP計画策定の事務局

役割
- WSの企画・準備・実施
- 各WSグループの調整
- エコツー会議への報告

メンバーと留意点
- 事務局（環＋知床財団）
- 官民バランスを意識
- 町の計画や事業との連携を図る必要

第1回作業部会(10/4)
①WSの企画・準備
②情報の収集および調
③関連事業との調整

第2回作業部会 (12/9)
①WSの運営
②情報の整理・集約

第3回作業部会 (1/7)
①エコツー会議への報告
②IP計画のデザイン
③インナーブランディング
④次年度計画

第４回作業部会
2月12日（水）

第５回作業部会
3月4日（火）

ワークショップの開催と取組み

位置付け
- IP計画の核となる、地域資源の掘り出し、評価、価値づけに関する協議
- ストーリー、伝えるべき価値、期待する体験などについてそれぞれWSを通じて起草、整理

構成
- 地区別に3グループを組織
- 各グループ3回の実施
- 作業部会と有機的に連携

	WS-1（抽出・共有） 11月25日 26日 12月4日	WS-2（集約） 12月17日 18日 20日	WS-3（ｱｳﾄﾌﾟｯﾄ） 1月15日 16日 17日
斜里地区			
ｳﾄﾛ地区	「他地域にない特別なもの」 「大切にしたい特別なもの」 を参加者同士で 抽出し、共有する	実際に体験できる場所や 具体的に何を来訪者に 体験してほしいのか を踏まえて議論する	第1回・第2回WSで整理 した価値や魅力を 来訪者向けに向けて 伝えるための文章に まとめる作業をする
羅臼地区			

作業部会 開催状況

1．実施概要

- **開催回数：**全5回（第3回作業部会まで実施済み）
- **位置づけ：**エコツーリズム検討会議の作業部会/IP計画策定の事務局
  事業の進め方、スケジュール感、関連事業となる観光庁事業について共有し、関連計画との関係性や策定後の利活用のあり方等について意見交換を実施。

2. 作業部会の構成メンバー

構成員	機関名	役職	氏名
	なみうちぎわをあるこう合同会社	代表	初海　淳
	一般社団法人知床しゃり	専務理事	河井　謙
	斜里町商工観光課	課長	南出　康弘
	羅臼町企画財政課	参事	三宅　悠介
	羅臼町産業創生課	まちづくり担当課長	伊藤　芳征
	Clutch.55株式会社	代表取締役	柿沼　宏明
オブザーバー	**機関名**	**役職**	**氏名**
	国土交通省　北海道運輸局観光部	次長	山崎　貴志
	一般社団法人知床羅臼町観光協会	事務局長	和久井　一躬

事業主体	機関名	役職	氏名
	環境省　ウトロ自然保護事務所	首席国立公園保護管理企画官	二神　紀彦
		国立公園利用企画官	伊藤　薫
	環境省　羅臼自然保護事務所	自然保護官	西村　健汰

事務局	機関名	役職	氏名
	公益財団法人知床財団	事務局長	玉置　創司
		事業部長	山本　幸
		羅臼地区統括参事	福田　一輝
		事業部参事	秋葉　圭太
		羅臼地区事業係長	坂部　皆子

3. 作業部会の開催概要

第1回作業部会

- **日時:** 2024年10月4日（金） 10:00～11:30
- **場所:** 斜里町ウトロ漁村センター（オンライン併用）
- **議事:**
  1.本事業の概要とねらい
  2.作業部会の設置について
  3.関連事業との連携について
  4.今後の取り組みと進め方について
  5.その他

第2回作業部会

- **日時:** 2024年12月9日（月） 9:30～11:30
- **場所:** 斜里町役場 2階大会議室（オンライン併用）
- **議事:**
  1.第1回ワークショップの実施結果
  2. 第2回以降のワークショップの進め方について
  3. 関連事業との連携について
  4. その他

第3回作業部会

- **日時:** 2025年1月7日（月） 13:00～14:45
- **場所:** 知床自然センター　2階会議室（オンライン併用）
- **議事:**
  1. 第2回ワークショップの実施結果
  2. 第3回ワークショップの進め方について
  3. 関連事業との連携について
  4. その他

ワークショップ「みんなで持ち寄る『シレトコのコト』」の実施概要と結果

1. 実施概要（共通事項）

- **開催回数**　：全9回（斜里・ウトロ・羅臼の各会場で3回ずつ実施）
- **目　　的**　：地域資源である「知床らしさ」を整理し、地域資源に紐付く「価値・ストーリー」を言語化する。
- **広　　報**　：各回の実施後、知床財団HP活動ブログおよびSNS（X、Instagramなど）を活用して内容を発信。

2. 第1回ワークショップの各会場の実施概要と結果

到達目標：
「他地域にない特別なもの」「大切にしたい特別なもの」を参加者同士で抽出し、共有する

- **斜里会場**
  - **日時:** 2024年11月25日（火）18:30～20:30
  - **場所:** 斜里町総合保険福祉センターぽると21
  - **参加者：** 27名（教員、町職員、ガイド、地域おこし協力隊、地域住民など）
  - **運営関係者:** 環境省5名、ファシリテーター1名、知床財団9名
- **ウトロ会場**
  - **日時:** 2024年11月26日（水）13:30～15:30
  - **場所:** 斜里町漁村センター
  - **参加者：** 15名（会社員、ガイド、団体職員、飲食業など）
  - **運営関係者:** 環境省5名、ファシリテーター1名、知床財団9名
- **羅臼会場**
  - **日時:** 2024年12月4日（水）18:30～20:30
  - **場所:** 羅臼町民体育館（らうすぽ）
  - **参加者：** 17名（町議会議員、漁師、自営業、観光業者など）
  - **運営関係者:** 環境省2名、ファシリテーター1名、知床財団6名

第1回ワークショップ　＜内容と結果＞

ワークショップで出された主な意見

斜里会場

- **野生動物の豊かさ:** エゾシカやキツネが日常的に見られる。
- **流氷:** 流氷が見えるスキー場は他にはない特別な魅力。
- **食文化:** 地元の新鮮な食べ物の美味しさが格別。
- **地域イベント:** ねぷた祭りなどの地域文化の魅力。

ウトロ会場

- **アイヌ文化:** 知床半島に由来するアイヌ語の地名が魅力的。
- **漁業文化:** 日本一のサケの町。漁師の仕事や水揚げの様子を間近で見られる特別な体験が可能。
- **動植物の多様性:** 動植物の種類が多く、撮影対象が豊富で飽きない。
- **自然と歴史のつながり:** 地形や景色が命の始まりや生活の歴史を物語る。

羅臼会場

- **景観の美しさ:** 国後島から昇る朝日の美しさは格別。
- **温泉文化:** 地元の人と交流できる「熊の湯」が人気。
- **漁業の技術:** 羅臼昆布や伝統的な漁法が誇り。
- **海の多様性:** 海水温の大きな変化が多様な海洋生物を育む特別な環境。

抽出されたカテゴリ

自然
食
伝統・文化・歴史
産業・くらし・人
全て

斜里　／　ウトロ

四季
近さ（距離感）
食
自然（風景・野生動物）
人・学び
全て

羅臼

第2回ワークショップ各会場の実施概要と結果

到達目標：

第1回WSで抽出されたカテゴリごとに、
実際に体験できる場所や具体的に何を来訪者に体験してほしいのかを踏まえて議論する

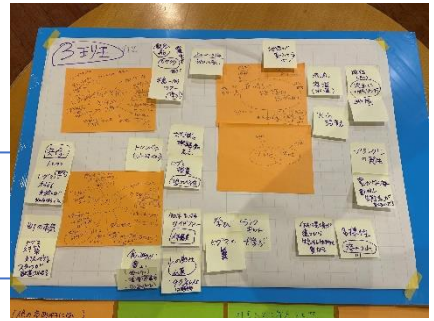
- **ウトロ会場**
  - **日時:** 2024年12月17日（火）18:30～20:30
  - **場所:** 知床世界遺産センター
  - **参加者：** 16名（自営業、団体職員、中学生など）
  - **運営関係者：** 環境省2名、ファシリテーター1名、知床財団5名
- **斜里会場**
  - **日時:** 2024年12月18日（水）13:30～15:30
  - **場所:** ゆめホール知床 会議室1
  - **参加者：** 11名（町職員、公務員、地域おこし協力隊など）
  - **運営関係者:** 環境省3名、ファシリテーター1名、知床財団6名
- **羅臼会場**
  - **日時:** 2024年12月20日（金）18:30～20:30
  - **場所:** 羅臼町民体育館（らうすぽ）
  - **参加者：** 14名（観光船事業者、公務員、牧場作業員など）
  - **運営関係者:** 環境省3名、ファシリテーター1名、知床財団6名

第2回ワークショップ　＜内容と結果＞

各会場のカテゴリと簡単なまとめ

ウトロ会場

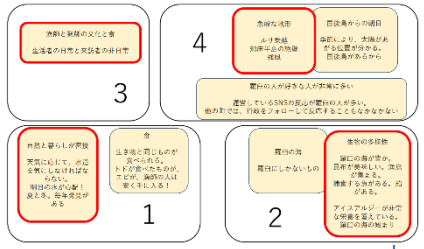
①伝統・文化・歴史…しれとこ100平方メートル運動を国内外に発信し、若い世代への啓発を強化。
②産業・暮らし・食…サケの漁業や「サケテラス」での体験を通じて産業の現場を知る。
③自然（動植物）…サケを起点とした海と陸をつなぐ生態系の話題が中心。
④地理・地形…知床五湖やカムイワッカ湯の滝など、「Fire and Ice」と形容される景観が特別。



斜里会場

①自然 …「知床半島」という凝縮された自然環境が生態系の多様性を支えている。
②伝統・文化・歴史…ねぷた祭りは津軽藩士との歴史的つながりが魅力。
③産業・暮らし・食…漁業は持続可能性を重視し、研究された漁法で高い成果を維持している。

※斜里会場は3班編成であったため、3つのカテゴリで進めた。



羅臼会場

①自然（自然と暮らしが密接）…自然に基づく生活スタイルが地域独自の魅力。
②自然（生物の多様性）…流氷がもたらす栄養豊富な環境とそれを活かした観光体験がある。
③産業・暮らし・食（漁師と猟師の文化と食）…漁業と狩猟の体験を組み合わせたツアーを提案。
④地理・地形（急峻な地形） …地形の美しさだけでなく、霧や断崖絶壁に生息する海鳥など動植物の価値にも注目

第3回ワークショップの各会場の実施概要と結果

到達目標：

第1回・第2回WSで整理した価値や魅力を、
来訪者向けに向けて伝えるための文章に端的にまとめる作業をする。

- **斜里会場**
  - **日時:** 2025年1月15日（水）18:30～20:30
  - **場所:** ゆめホール知床 会議室1
  - **参加者：** 12名（団体職員、大学院生、町職員など）
  - **運営関係者:** 環境省2名、ファシリテーター1名、知床財団7名
- **ウトロ会場**
  - **日時:** 2025年1月16日（木）18:30～20:30
  - **場所:** 斜里町漁村センター
  - **参加者：** 7名（ネイチャーガイド、漁師、町議会議員など）
  - **運営関係者:** 環境省3名、ファシリテーター1名、知床財団6名
- **羅臼会場**
  - **日時:** 2025年1月17日（金）18:30～20:30
  - **場所:** 羅臼町コミュニティセンター
  - **参加者：** 11名（観光船事業者、町議会議員、非常勤国家公務員など）
  - **運営関係者:** 環境省3名、ファシリテーター1名、知床財団8名

第3回ワークショップ　＜内容と結果＞

斜里会場

ウトロ会場

羅臼会場

各班ごとに「小ストーリー」と100字程度の文章にまとめる。

2班（自然）担当：片山		
【小ストーリー】	・流氷から始まる壮大な知床ストーリー。流氷から始まる命の循環。流氷が繋ぐ命。 ・知床の全ての始まりである「流氷」を通じて、生態系の一部であることを実感・体感する	
【100字程度のストーリー】 ※文章になってなくてもOK	・様々な環境条件が重なり合い、、毎年流氷が接岸する知床。火山が生んだ雄大な山々と流氷によって浸食され形成された独特な地形により、豊かな生態系が小さな半島の中に凝縮されています。海のいきもの、森のいきもの、そしてその中ににある人の営みが織りなしている。 ・流氷は新たな命の源であり、多様ないきものの出発点。その一つ鮭は川を通じて森のいきものに栄養を届ける。そして森の栄養が海を豊かにする。 ・プランクトンを引き連れやってくる流氷、それを求めて集まる海の民、陸へとつなぐ鮭、そんな鮭を多くの動植物たちが陸で待ちわびている。「もっと知るには知床に行くしかない」	
【グループで出たWord、フレーズ】	＜Word＞ ・流氷→断崖絶壁→海と森をつなぐ ・流氷の時期は海を休めて海を豊かにする期間（漁師目線） ・流氷が教えてくれる ・流氷が与えてくれる ・流氷から始まる ・海と森と鮭とクマと人 ・つなぐ・命・いきもの ・鮭・ヒグマ ・流氷は知床の起点、全ての始まり ・命の繋がり ・鮭がもたらす生態系の営み ・鮭の存在感	＜フレーズ／文章＞ ・共存：厳しく雄大な自然の中に人がいること、生活していることに意味がある。 ・流氷の存在（量）は地球の気候のバロメーター。流氷は流氷ウォーク等、人へ楽しみも提供してくれる。 ・小さな半島に凝縮する豊かな生態系 ・自然と共存する場所「知床」 ・流氷がはぐくむ豊かな自然に抱かれた知床半島 ・流氷が与えてくれた知床の地形と自然 ・流氷がつなぐ豊かな生態系 ・知床を訪れる流氷は北半球最南限で、接岸期間も長い。 ・美しい自然、知床はそんな一言で表せるほど単純じゃない。 ・流氷はどこで体験？斜里～ウトロの海岸線 ・流氷から何を学べる？気づきは？流氷がもたらす豊かな栄養 ・知床の流氷は？北半球南限で一番長く接岸している→潮の干満や風で一日50キロmも動く。日々変化。水平線は30キロm先。

小ストーリーは2～3行程度。

2-3行にまとめる文の例

遡上し産卵を終えた鮭は、
海と森のつながりと
生命の力強さ・尊さを教えてくれる

・地元住民だからこそ知る魅力や視点が集まり、
　来訪者にとって「体験価値の高い」内容が整理された。

・各班が具体的なストーリーを短い文章にまとめることができ、
　11つのストーリーの素材が集まった。

知床ならではの価値を伝える『ストーリーのたまご』

ー4つのテーマと９のたまごー

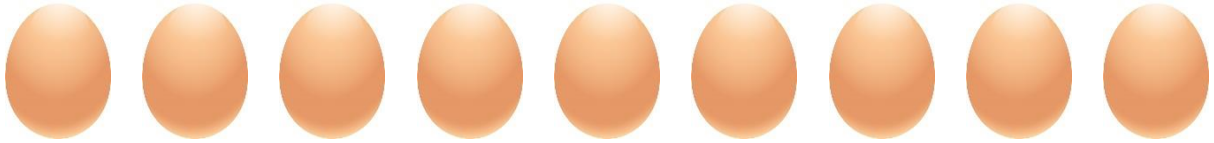
＜4つのテーマ＞

自然

地理・地形

伝統・文化・歴史

産業・暮らし・食



【テーマ：自然】

知床には、流氷からはじまる命の循環、流氷が繋ぐ命がある

シベリア海岸のアムール川河口で生まれた流氷は、季節風や海流にのって1,000km以上も離れた知床に毎年やってきます。知床は流氷が見られる南端の地でもあります。そんな流氷は知床の人々の生活の一部となっていて、季節の移り変わりを知らせてくれたり、潮の干満や天候により日々違う顔を見せてくれたりします。さらには、「流氷ウォーク」などのアクティビティを通じ、人々は流氷と直接触れ合い、流氷を体感することもできるのです。

流氷は、知床の海・陸の生態系のつながりの源となっていることも忘れてはいけません。流氷が着氷している時期は、漁師さんも漁に出ることは出来ませんが、漁師さんは「流氷の時期は海を休めて海を豊かにする時期」と言います。それは、流氷の下で資源が保護されるとともに、流氷によって大量の栄養が運ばれてくるからなのです。流氷の中に閉じ込められていた植物プランクトンが春になると大増殖し、それをエサにする動物プランクトンが大量に発生します。今度は、これを食べるために魚たちが集まってきて、その魚を求めてアザラシやトドがやってきます。そして、生態系のトップに君臨するシャチがあらわれます。このように知床の海には流氷を起点とした食物連鎖が形成されているのです。

また、流氷は海の生物だけでなく、陸の生物の命も育んでくれます。豊かな海の栄養で育ったサケ・マスは海から川を遡り、ヒグマやオジロワシ、シマフクロウなどの猛禽類の重要な食物資源となります。これらの動物たちの糞などは、今度は土に還り、森の栄養分となり、最後は雨水とともに海に戻っていきます。

このように知床では海- 川- 陸にわたる流氷で始まる壮大なストーリーがあるのです。

火山が生み出した奇跡のアクティビティ「カムイワッカ湯の滝登り」

知床半島の火山活動が造り上げた知床連山の一角の硫黄山の麓には、アイヌ語で「神の水」を意味するカムイワッカ湯の滝があります。ここを流れるのはただの水ではありません。知床硫黄山から湧き出る硫黄を含んだ強酸性温泉水、まさに名前のごとき「神の水」が流れてくるのです。

カムイワッカ湯の滝では、魚やコケも生きていくことのできない強酸性の温泉水を感じながら、この奇跡の滝を一歩一歩登っていく沢登りを楽しむことができます。川を登るにつれて温度が上がっていき、最終目的地の「4の滝」では約35～38℃という絶妙に気持ちの良い温度になる不思議な川です。

カムイワッカ湯の滝登りは、単なるアドベンチャーアクティビティではなく、世界にも類まれなユニークな体験であり、まさに地球のチカラを体感しつつ学ぶことのできるアクティビティと言えるのではないでしょうか。

クラウドファンディングのはしり「しれとこ100平方メートル運動」

知床には、原生的な自然が残されていると言われています。でも、それはたまたま残っているのではなく、我々の先人たちの自然に対する敬意と畏怖により、残されたのです。その代表的な取り組みが1977年に始まった「しれとこ100平方メートル運動」です。

日本全国が土地への投機ブームで湧く中、その波は知床の地にもやってきました。開拓跡地が不動産業者などの手に次々と渡り、知床も乱開発による自然破壊の危機に瀕しました。それに対して知床では、漁師を中心として「森を豊かにすることで、海が豊かになる」と考え、また、当時の斜里観光協会会長は「知床の自然は元金で、その利息で観光が成り立っている。だから、元金を減らすようなことをしてはいけない」と考えるなど、今で言う「持続可能な資源の利用」、「持続可能な観光」という考えが地域に既に根付いていました。

こうしたことを背景として、当時の藤谷豊町長は、イギリスのナショナル・トラスト運動になぞり、全国に呼びかけて100平方メートルの土地を買い上げるためのお金を寄付のひと口として「しれとこ100平方メートル運動」をスタートすることを決意したのです。まさに今のクラウド・ファンディングのはしりと言えるかもしれません。

「しれとこで夢を買いませんか」のキャッチフレーズで土地の買い取りや植樹費用等にあてる寄付を募った結果、この運動は自然保護に関心を持つ全国の人々の共感をよび、全国各地から寄附金が寄せられました。

全国の人々の想いは受け継がれ、現場のスタッフはもちろん、ボランティアの方々、地域の人や大学の科学者の方の力と知恵を借りながら、今も原生の森の復元のための活動が進められています。

【テーマ：伝統・文化・歴史】

知床では先人たちの「ロマン」の軌跡を辿ることができる

知床は、地理的に見ても北海道の東の果ての地であり、また、冬には寒さ、雪、強風などの厳しい自然環境にさらされます。しかしながら、知床では大昔から人々が住み着き生活をし、様々な歴史を積み重ねてきました。

知床半島にあるカメのような形をした大きな岩、チャシコツ岬上遺跡には、今から1200年ほど前、8～9世紀のオホーツク人の集落跡があります。オホーツク人は、その遺跡からも、海獣狩猟や漁労を中心とする生活を送っていたものと考えられています。

また、知床の語源はアイヌ語の「シリ・エトク（地の突き出たところ）」であるように、知床には現在でも多くのアイヌ語由来の地名が残り、アイヌ文化の跡を感じることができます。そして、知床にはキムンカムイ（ヒグマ）、コタンコルカムイ（シマフクロウ）、レプンカムイ（シャチ）などのアイヌ語の「カムイ（神）」がたくさん存在し、アイヌの人々が知床の動物を崇めながら生活していたことがうかがえます。

斜里で毎夏行われる「ねぷた祭り」は、これらと全く違った形で歴史を感じることができます。今から200年ほど前に、北海道周辺に出没するロシア船に備え、幕府から斜里での警備を命じられた津軽藩士が、この地で飢えと寒さにより死亡した事件が起きました。その後、斜里で津軽藩士の慰霊が続けられてきたことが縁となり、「ねぷた」の本場である弘前市から斜里に伝授されたのが「斜里ねぷた」なのです。

このように、知床では、この地ならではの恵みを見つけ出し、知恵や努力で生活を切り拓き、力強く生きてきた人々の軌跡を色々なところで見ることができます。

漁業、農業を担う人々の顔が見えるまち「知床」で味わう最高の贅沢

知床（斜里町）は、オホーツク海の恵みにより、サケ・マスをはじめとした豊富な水産資源を誇り、漁業がとても盛んなまちです。2023年のサケの漁獲高が日本一、しかも20 年もの間、2021年をのぞいて１位の座をキープしています。また、かつて知床の開拓にあたった先人の知恵や努力のおかげで、ジャガイモ、ビート、ニンジンなど農業もとても盛んです。このように、知床は、日本にとって重要な食料生産基地の1つなのです。

こうした漁業、農業を担う生産者の人々の「顔が見える」ということも知床の大きな特徴です。

ウトロ漁港では、大量のサケが積まれた漁船が戻ってくると、水揚げと選別作業が始まります。成熟度やサイズ、オスかメスかなどが漁師によって素早く判断され、右に左に振り分けられていきます。「ウトロ鮭テラス」では、その迫力あるスピーディーな作業現場を、2階の見学スペースで真上から眺めることができます。大きなものでは3kgにもなるサケをあっという間に選別して魚箱へと収めていく様は、迫力満点で1時間眺め続けていても飽きません。

一方、道路を車で走っていると、その車窓からは広大な斜里平野に広がる美しい農地で作業する農家さんの姿が見られます。ジャガイモの花で埋め尽くされる畑や、収穫間際の金色に光る麦畑などは、知床の大地を鮮やかに彩ってくれます。

町内にあるスーパーでは、収穫時期になると知床で獲れたジャガイモならびに、小麦やニンジンは加工品を買うことができます。知床のニンジンで作るニンジンジュースは、斜里産ニンジン100％にほんの少しのレモンを入れただけの一品で、ニンジン嫌いの人も大好きになるという、地元にも観光客にも評判のジュースです。

また、スーパーの魚コーナーでは、その時の旬な魚がきれいにパックされて並びます。付けられた値段によって、たくさん獲れているのか、不漁なのかが分かるのも、地元ならではです。このように、海産物も農作物も、旬なものを、最高の瞬間に手に入れ、味わうことが出来るのが、ここ知床なのです。

陸の王者ヒグマ、海の王者シャチ、空の王者オオワシ、自然の王者が集う知床。
流氷から始まる豊かな生態系の循環のなかに、来訪者は身を置くことで、
人間も自然のサイクルの一部ということを再確認し、自らを知り・生の実感を得ることができる。

知床では、流氷がもたらすアイスアルジーから始まる、豊かな自然の恵みのサイクルが存在します。プランクトン→オキアミ→魚→海獣・ワシという食物連鎖、その頂点に立つヒグマ・シャチ・オオワシ。沖合10kmまでの範囲で、多様な動物や植物、例えばアホウドリ3種が見えたり、陸では希少な鳥類シマフクロウなども時には見ることができます。知床、羅臼町では陸海空の生態系の頂点に立つ生き物、すべてを見ることができます。
また、深海魚の新種がいくつも発見されるなど、いまだによくわからないものが日々、出てきています。
知床の海で繰り広げられる多様な生物の世界は、バリエーションに富んだ魚のどれもが美味しい・羅臼昆布が日本三大昆布の一つ、という単なる味覚の話にとどまりません。クジラやシャチ、海鳥を見学するクルーズなど観光の魅力にもつながっています。また、海産物などの加工品の工程に触れられたり、鮭を実際に触れるお祭りがあったり、漁師をはじめ地元の人々の魅力的な話が聞けたり、沖合に浮かぶ漁火の美しさを見ることができるのも、知床、羅臼町ならではです。
海から始まり陸や空につながる知床の生物の多様性が、食や祭り、伝統文化など人の営みに直結していることを、来訪者は体感できます。

【自然】生物の多様性

ストーリーを伝えるおすすめの場所や体験

■春はシャチ。夏はクジラ。秋はヒグマ。冬はワシ。どれもクルーズで見ることができる。
■もしもクルーズが欠航しても、春先はヒグマが食べるような山菜（イラクサ、フキなど）、
夏はトキシラズ（サケ）やエビ、秋はシカ肉やクマ肉、サケ、冬はウニやタラなどを食べることができる。
■昆布番屋で、昆布を加工し歴史を学べる体験ツアーがある。

Adobe Stockより（仮）

©Shiretoko Nature Foundation

Adobe Stockより（仮）

ルサの強風やそこからの景色に代表されるような極端な天候や急峻な地形は知床ならではの山・川・海そして太陽の繋がりをもたらし、人間の五感すべてに訴えかけてくる。
来訪者は五感を開放し、能動的に動く力強さを得ることができる。

知床は山・川・海が近く、火山活動が生み出した断崖絶壁など急峻な地形と、そこから生まれる極端な自然現象が存在します。山から海へ吹き抜ける「ルサ（ルシャ）のだし風（ルシャモン）」」と呼ばれる強風や、羅臼岳から吹き降ろす「羅臼おろし」など強風という自然現象に名前がついているのも特徴です。

日本で一番開通期間が短い国道「知床横断道」も急峻な地形という特徴を表す代表格とも言えます。
霧、吹雪など天候の不安定さは緊張感を抱かせますが、それ自体を楽しむという感覚が育まれます。この地で生き抜いている海鳥など動物・植物を目の前で見ること、人間がここで生きていくために必要な知恵・技術に触れることにより、生命の力強さを学ぶことができます。山・川・海の近さから、山と海の恵みを享受し、同時に体感することもできます。

「海抜０ｍの高山」とも形容できる地形、息を飲むような絶景と、荒れ狂う原始のままの風は、来訪者のそれまでの世界観を崩し、野生を呼び覚まします。

【地理地形】急峻な地形

ストーリーを伝えるおすすめの場所や体験

■ルサのっこし。羅臼とウトロをつなぐ道。冬になるとウトロと羅臼の流氷を同時に見ることができる
■日本で一番開通期間が短い国道「知床横断道」スリリングな橋もある。小鳥のさえずりもある。カーブを曲がるとすごい景色が広がる。国後島も見ることができる
■たった40分のドライブでオホーツクの海、根室海峡、100名山の羅臼岳を間近に感じ、様々な天候を感じられる

*写真は仮 （Adobe Stockより）

極めて厳しい自然の中で「りょう」を生業とする漁師と猟師は、
長い時間をかけて紡いできた誇りと共に、潮の匂い・血の匂いにまみれて
生きている。
「りょう」から食卓まで境界線がなく、来訪者は生命を五感で味わう体験ができる。

知床では、生活者の日常が来訪者の非日常ということが際立っています。厳しい自然の中で生きていくには命がけの部分があり、海の漁師と陸の猟師ならではの知恵と気質があります。一人ひとり、やり方の違いやポリシーがあるように、その手法は独自の文化にまで昇華されています。例えば、知床の、特に羅臼側の海は火山活動により深海となっており、深い海の地形とそれゆえ多種多様となっている魚介類に合わせた漁師の技術があります。そして、知床に暮らす漁師や猟師は、自分たちの手を汚したものでお腹を満たすことで、初めて生命を感じることができる、ということを知ります。

市場には魚が上がり、海鮮工房では鹿肉やトドの肉が売られています。それらは新鮮で美味しいだけではなく、厳しい自然の中で生き抜く漁師と猟師の知恵を学ぶことや、獲られたものが自分の口に入る過程を知っているという安心感にもつながります。

自然そのものを食べることで、来訪者は活力、知恵と安心感を得、生き抜く力までももらうことができるでしょう。

【伝統文化】漁師と猟師の文化と食

ストーリーを伝えるおすすめの場所や体験

■市場や海鮮工房などの販売場

■市場でのセリ・船の上・番屋、シカ（鹿撃ち）などの解体場での非日常体験　＜現在は限定公開＞

■暮らすように何泊か滞在し、知床の生活者の一部となる体験をする

©Shiretoko Nature Foundation

©Shiretoko Nature Foundation

Adobe Stockより（仮）

オホーツク文化から続く、自然と密着した四季折々の極めて特徴的な暮らしがある。
来訪者はさまざまな景色・食事・人の営みを楽しむことができ、
訪れるたびに知らない体験ができる。

知床には、はるか昔のオホーツク文化から現代まで続く、自然と密着した暮らしがあります。それゆえ、四季で変わる景色、四季で変わる食べ物（魚介・山菜）、四季で変わる動物・植物、四季で変わる人の流れが極めて特徴的です。特に海の中は季節により20～21度の変化があり、海の中での四季も存在します。

来訪者は魚の旬だけでなく、鳥の種類、国後島からのぼる朝陽の位置、漁師など人の動き、風向き、海の中まで、と実にさまざまな面から四季を感じることができます。登山・カヤックなどのアクティビティ、市場の競りなどの産業文化、オホーツク文化などの歴史を体験できたり、魚介・鹿・山菜・昆布・ウニ、場合によってはトド・ヒグマまで食することもできたりします。

四季によって表情が変わることは、来訪者をリピーターにする強い要因であり、来訪者は、訪れるたびに知らない体験を手に入れることができます。

【衣食住(四季)】自然と暮らしが密接

ストーリーを伝えるおすすめの場所や体験

■知床半島の海岸線や番屋などを歩く
■知床羅臼ビジターセンター、ルサフィールドハウス、知床自然センター
■シーカヤック

©Shiretoko Nature Foundation

Adobe Stockより（仮）

©Shiretoko Nature Foundation